

氏名（本籍） ハン 橋 モト 本 マサ 雅 オ 央（東京都）
 学位の種類 博士（音楽）
 学位記番号 博音第53号
 学位授与年月日 平成15年3月25日
 学位論文等題目 論文 シューマンの歌曲
 - ハイネ作品とのかかわり -

論文等審査委員

（総合主査）	東京芸術大学	教授（音楽学部）	高橋大海
（演奏審査主査）	”	”（”）	高橋大海
（演奏副査）	”	”（”）	朝倉蒼生
（”）	”	助教授（”）	永井和子
（”）	”	教授（”）	井原直子
（”）	”	”（”）	多田羅迪夫
（”）	”	”（”）	中嶋敬彦
（”）	”	”（”）	鈴木寛一
（論文審査主査）	”	”（”）	中嶋敬彦
（論文副査）	”	”（”）	高橋大海
（”）	”	”（”）	朝倉蒼生
（”）	”	助教授（”）	永井和子
（”）	”	教授（”）	多田羅迪夫
（”）	”	”（”）	鈴木寛一
（”）	”	”（”）	井原直子

（論文内容の要旨）

通常の場合は、声楽曲では詩に音楽がつけられるものであるから、したがって演奏家はその作品を演奏するにあたっては、まずその作品を理解しようと努めるならば、その際にはとりわけ詩に対する理解が不可欠となる。しかしながらそれはただ詩を読み込んでそこにある出来事、情景を理解することのみならず、さらに踏み込んでその詩の構造を把握することによってはじめて詩と音楽によってそこに構築されているものの俯瞰が可能となる。すなわちそれは楽譜を読み込む作業の大切な手がかりである。とは言われることであるが、それはとりわけシューマンとハイネの作品の関係を理解するうえでは、そのハイネの詩のもつ凝縮性、およびその韻律により、それは重要であるように思われる。そこで本論文ではハイネの詩の持つ類を見ない凝縮性とそれに対するシューマンの緻密な読み込みによって生まれた音楽作品についてそれぞれに検証し、シューベルトとは一線を画したところで、仮にシューベルトにその絶頂期をむかえたドイツ歌曲がシューマンを経ることによってしだいに変遷し、ひいては後期ロマン派に影響を及ぼすとすれば、そこにシューマンとハイネの作品を検証することによって、その根底には詩の韻律が深くかか

わっているという認識および結論にいたることが本論文の目的である。

論文の構成としては、序章、第1章から第6章、および結論としてのあとがき、となっている。まず序章ではロマン派の時代における文学作品の傾向として、それ以前の時代には見られなかった詩におけるあたらしい考え方としてのいわば「断章主義」の存在をとりあげ、ハイネの詩にその断章の例を見るものである。しかしながらここで述べるところのハイネの詩に見られる「断章性」の提示は、まずこの論文における一貫性の軸の出発点となるものであり、シューマンがそのハイネの詩およびその韻律にかかわることで彼の歌曲における「後奏」が発達するという本論文の結論が導き出されるうえでの大切な伏線となる部分である。つづく第1章では詩の韻律の時代的な変化をゲーテ、ミュラー、レルシュタープ、およびハイネらに見て、そこではシューマン以前としてシューベルトの作品を取り上げる。シューベルトの音楽作品の分析というよりはむしろその時代の詩人の作品の韻律的な傾向を示すという試みである。すなわちそれぞれの詩の韻律的な傾向とそれにシューベルトはどのように対処したかということ进行分析することによって、この章によって後のシューマンとのあいだに一線を画したうえで、そのことによってそれぞれの立場を浮かび上がらせようとするものである。第1節では代表的なゲーテ作品を取り上げ、その古典的な透明感と端正な韻律にシューベルトがどのように対処したかを分析することがねらいである。第2節ではシューベルトによって「美しき水車小屋の娘」となっている牧歌的なヴィルヘルム＝ミュラーの作品をとり上げて、その韻律的な変遷を紹介することがねらいである。第3節ではシューベルトの歌曲集《白鳥の歌》よりレルシュタープとハイネの作品の韻律について列挙し、ここで初めて出現するハイネ作品のそれまでとは異なる先駆性によって生じるところの一線をここで画すことによって、それらへのシューベルトのかかわり方から、その後のシューマンのハイネ作品についての取り組み方を探るうえでの導入としたいと考えている。第3章ではシューマンのハイネによる《リーダークライス》をとりあげて、ハイネのゲーテらの影響が著しい初期の詩の韻律に、シューマンが最初の歌曲集としてそれらにかかわり、そこではのちの彼の作品の萌芽となるさまざまな要素を見いだそうとするものである。第4章ではシューマンの歌曲集《ミルテ》からハイネ詩によるものをとりあげてその韻律とそれへのシューマンのかかわり方を検証するものである。ここではその歌曲集の性質上からハイネよりはシューマンのほうにその重心が移動したかたちの検証となる。第4章では歌曲集《詩人の恋》全16曲について韻律的な立場から検証を試みるものである。ミュラー作品の影響によってさらにいちだんと高められたハイネの詩とシューマンの出会いによって、これはシューマンの連作歌曲ではいちばんまとまりのよいとされる作品となるのであるが、ある部分においては詩人ミュラーや、作曲家リストらの作品と比較しながらさまざまに検証を進めることによって、結論を導き出すための、ハイネの韻律とシューマンの後奏の関係についてのさまざまな要素を積み重ねてゆく論文の中核をなす部分である。第4章では歌曲集《詩人の恋》から除外された4曲について検証するものである。シューマンのハイネ詩に対する一方的な思い込みによって、そのことが結果としてもっともシューマン的などさえ思えるこの4曲についての検証は、ハイネというよりはシューマンを知るうえで興味深いものがある。結章ではまとめとしてこれまでの流れを総合的に検証し、そこからさらにハイネの詩とのかかわりによって生じたところのシューマンが発達させた歌曲における「後奏」を導き出し、さらに検証を加えて、ハイネ詩の3強格の韻律にそなわる断章性とそこにひそむシューマンの後奏との関係についてそこに本論文の結論を見いだそうとするものである。